

発話態度と話法

—政治小説のアイロニー性—

はじめに

宮崎夢柳『虚無党実伝記鬼啾啾』（旭橋活版所一八八五・一〇）には、（二）のような虚無党批判がある。

（二）如何に魯西亜政府が専制抑圧の政事を施し法令を布くにもせよ、祖先以来幾百年、君民の情深く義重きを忘却し、欺る大逆無道を謀る彼の虚無党は何者ぞ。残忍と云ふべきか、暴戾と称すべきか、南山の竹を切り尽すも、恐らくは其の罪を書し難く、東海の波を注ぎ来るも、恐らくは其の悪を洗ひ難からん（『鬼』10）

（一）には、「官憲の目をまどわす夢柳の詐術も入っていると見えよう。ただ、それを強調することは危険で、夢柳がこうした虚無党の行動を全的に支持していたとはいえない」とする山田有策氏の注釈がある。緒言にも、「行文の慷慨激烈なる、字々

西田谷 洋

稜を起し、針々血を見るに於てをや。余感嘆墮く能はず、直ちに全編を訳出せんと欲す。而して又た心竊かに憚るところあり」という虚無党への共感と、「皇帝陛下にまでも未曾有の禍害を加え（略）反逆の罪千載銷せざるの事跡を知つて、以て自ら改心するところあらんことを」という虚無党批判が共存しており、一方への一義化は直ちにはできない。だが、相反する立場の片方に政治的位置を同定するならば、それに反する言説は、字義的な虚無党観を提示しつつその否定を含意させるアイロニーとなる。

この種のアイロニーは、桜田百華園「西の洋血潮の暴風」〔『自由新聞』一八八二・六・二五—一・一六〕第一回でも「勇ましくも革命なせし外国人の有様を鑑みて、自己が権理を復し給はば、訳者の慶幸これに過ず」と、「仏国革命の惨状を

鑑みて、其覆轍を踏ぬよふ心を注ぎ給へ」という対立の中に看取されよう。夢柳「仏蘭西太平記鮮血の花」(『自由燈』一八八四・五・一一―七・二七)も同様であり、政治小説の方法の一つに、政治的イデオロギーの葛藤を用いたアイロニーがあつたと言えよう。

ところで、情報伝達としてのコミュニケーションで期待される発話態度とは、事象・出来事をありのままに誠実に、交互に交替して語ることだろう。だが、嘘やアイロニー、発話の重複等の現象も、日常的に経験する。それでも、コミュニケーションが成立するのは、人が、文脈等の背景的情報を主体的に駆使し、有契的に言葉の意味づける推論で、言説を理解するからに他ならない。物語テキストでは、意図伝達のために様々な修辭・構成等の言説戦略が用いられている。同時代的には「故疑」・「諷諷」・「諷諷法」⁽⁵⁾と呼ばれた、政治小説の地の文で使用するアイロニーもまた、言説戦略の一つである。字義と異なる表意を持つアイロニーは、政府側の言論統制下には有効な表現方法の一つと言えよう。なぜなら、送り手の意図をふまえた推論解釈を民権派は要請され、一方でその通りに官憲が解釈したとしても、字義的な意味で抗弁が可能だからだ。

本稿は、政治小説の代表的な方法の一つであるアイロニーを表現する語りの機構の解明を目的とする。そのため、先行するポスト構造主義的なアイロニー観の問題点を指摘し、次にアイ

ロニーを言説と事象に対して語り手が主体的に動機づける言語運用として捉えることにする。

一、坪内逍遙「自由太刀余波鋭鋒」と反語信号

本説では、意味論的アイロニー観を検証した上で、ポスト構造主義の言及理論を検討し、話法の観点からアイロニーを捉え返すことにする。

言語哲学で意味論の側からアイロニーを捉えたのは、大沢真幸氏である。大沢氏は、アイロニーの意味は、言及される意味の水準から独立した専ら言及する上位の水準に位置づけられて決定されるとし、この特権的な場を「主体」の先験的審級と呼んだ。全ての「発話」は、その「意味」が決定可能なきには、「主体」の先験的審級に帰属させうる「一種の言及」⁽⁶⁾として把握され、通常、言及性が意識されないのは、「言及対象の性格によるものと解釈しうる。アイロニーの場合、言及の対象となつた行為は仮構的なものとして了解されていたが、他の多くの発言では、言及対象となる行為が、言及という行為と同様に現実的なものと見なされ」⁽⁷⁾ると説いた。

近代文学研究でも、佐藤泉氏は、字義と含意を持つアイロニーが、「言語・記号の意味の同一性そして決定可能性という觀念を相対化し、言語・記号一般の始源的ありよう」⁽⁸⁾を示し、それを理解し得る聞き手にのみアイロニーとなると見る。そこで、

佐藤氏は発話が「實際の話し手の口唇を借りた別の審級から届けられる『二重の言葉』」ならば、アイロニーの伝達はこの審級を前提にして成立すると言う。

大沢氏や佐藤氏に共通するのは、全ての言説を超越的な審級からの引用とし、アイロニーの理解が超越的審級を前提にすることである。また、大沢氏は、アイロニーは言語表現の性格によつて他と区別されると説く。この立場で(1)を説明すると、(1)は官民調和論者の虚無党批判に言及しており、言及性・仮構性を理解しうる者のみがそれがアイロニーだと理解できるということになる。

だが、言及理論には、欠陥がある。第一、全ての言説が引用ならばアイロニーと通常の言説を区別するのは何か。換言すれば、言及・引用は「皮肉に固有の現象ではな⁽¹⁾い」。第二、言説の性格を指標とする大沢氏の場合、その性格自体は何によつて決定されるか。理論的要請として受け手の解釈が問題となるはずだが、第三、アイロニーを受け手の側からのみ説明する佐藤氏の場合、送り手が意図しても受け手が理解しないアイロニー(2)を説明できない。送り手の主体的な動機づけによつて言語が運用されていると考えなければ、言語事象への予測可能かつ有意味な説明が困難となるはずである。第四、大沢氏の場合、遂行仮説を理論的前提としているが、後述する如く遂行仮説自体には欠陥がある。

ただし、第一の批判をかわす方策がある。ハラルト・ヴァインリヒが主張した、アイロニーにはそれがアイロニーであることを告知する反語信号が付属するという考え方である。ヴァインリヒとは、反語信号として、「眼のウインク」や「咳払い」、強声、特別な語調、大げさな表現のたたみかけ、大胆なメタファ⁽¹⁾、長すぎる文、語彙の反復、或いはイタリック活字体、引用符⁽²⁾を挙げた。また、橋元良明氏は、「日本語の場合、『表現内』のものとして、『随分』『ほんとうに』等の副詞や、『何と』『さぞや』等の感嘆詞あるいは不必要な敬語の使用なども一種の反語信号として機能する^(1,3)」と指摘した。

『自由太刀余波鋭鋒』(東洋館一八八四・五)第三齣第二場で言へば、庵^{アントニイ}尼^{ニイ}が、舞^{ブル}妻^{ウサ}多^タ須^スの公正さから与えられた発言の機会を、舞妻多須攻撃に利用し、「理性よりも感情に訴え^(1,4)」て煽動し、舞妻多須の公正さに繰り返し触れる。この舞妻多須の至公至正性への言及の反復が反語信号であり、(2)はアイロニーとなる。

凡そ人の行も、悪事は其身死しても後も、尚世に長く残れども、善事は数々其骨と、共に土中に堆もれて、世にしまれずしてやむことあり。あの獅威差の身の上にも、これに類する行の、果てしなしも保し難し。(2) 至正至公の君子たる、舞妻多須氏は獅威差をば、野心非望を抱く者と、いはれたりしが其事の、もし果して然らんには、実に

嘆くべき過失にて、其過失のある故に、誅殺されたる獅威差の、浅ましかりし身の果も、又嘆くべく悲しむべし。(B)舞婁多須氏をはじめとして、義卒に与せし人々は、皆これ正義の君子なる故、此度自分に許を与へて、なき獅威差のあとをとひ、兼ては自分の胸懷を、吐露することを許されたり。そもそもジュリヤス獅威差は、かくいふ自分の信友にて、彼の人自分を遇するには、信ならざるなく、義ならざるなし。されどもマアカス舞婁多須氏は、彼を目にして野心非望を、抱く者といはれたり。然してさいふ(B)舞婁多須氏は、諸君も兼て知らるる如き、至正至公の君子たり(自)

では、最初の発話(B)は皮肉ではないのか。橋元氏は、言及理論では「アントニーの発話は、第一回めにおいて既にブルータス支持者の一般的感情の「言及」である。しかし、この場合、明確な反語信号を伴わねばならないため、まだ「使用」との区別は容易ではない」と主張する。だが、(B)は、獅威差の埋もれた善行の示唆と、舞婁多須の獅威差悪人説への疑義に挟まれていて、それらの文脈情報からアイロニーとして解釈しうる。また、庵鬼尼が(B)以降をアイロニーとして発話しているならば、(B)のみをアイロニーを意図していないと考ええるのも不自然である。また、発話とその反復が付随しても、発話がアイロニーだとは限らない。発話と状況・文脈との不整合

が認知されれば、反語信号がなくても、発話をアイロニーとして推論できる。そもそも、送受信者に予め共有されるコードとしての反語信号は存在を厳密には証明できない。第一の批判への反論は瓦解する。

言語哲学の意味論的アイロニー観の欠陥は、理論的前提であるポスト構造主義的言語観自体の欠陥ではないか。その代表的な概念の相互テクスト性を検討する。

相互テクスト性とは、「どのようなテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テクストはすべて、もう一つの別なテクストの吸収と変形にはかならない」と定義される。さらに、ジェラルド・ジュネットは、相互テクスト性を、「テクストを他のもろもろのテクストに、明示的にかく暗黙裡にかはともかく、関係づけているあらゆるもの」である超テクスト性として捉えた。相互テクスト性とは、第一にテクストの内部で生み出されるテクスト間の相互作用であり、第二にはあるテクストがどんな方法で歴史を読み歴史に組み込まれのかを示す指標でもある。特に、第一の立場では、あるテクストは、先行・共存・後行する無数のテクスト群によつて横断され、絶対的な意味での起源・独創性は存在し得ない」とされた。これは、「すべての記号は、引用されうるし、引用符でくくられうる。このことによつてその記号は、与えられたすべてのコンテクストとたもとを分かつことができるし、新しいコンテクストどもを無限

に、絶対に飽和可能でない仕方では生み出すことができる」というデリダの反復・言及可能性の主張と同調する。

なるほど、ポスト構造主義の主張の如く、言説は社会・制度・文化としての言語からの借用物である。ポスト構造主義は、言説を引用された言説として、既存の言語という記号体系自体を語るメタ言語として捉える言語観を持つ。ただし、言説を、言語に言及するメタ言語であり相対的な関係概念だと言ったところで、言語事象に対して何ら有意味で生産的な議論が展開することは困難だろう。メタ言語は狭義の引用に限られず、通常の言語表現と引用表現の違いが説明されねばならない。借り物であっても、人は言語を自分自身のものとして使用し、他者の言葉にも他人のものとして所有権を与える。自己の言説の中に、他者の言葉を引用する必要が生じたとき、人は他者の言葉を自分の言葉とは区別して提示する。語用論的な話法の観点を欠く限り、アイロニーの把握は難しい。

二、汎人称発話説と遂行仮説

本節では、汎人称発話説のアイロニー観及び遂行仮説を検討する。

橋元氏は、「字義通りの発話が可能な立場の人間に視点を移し、結果的に「言及」とみなしうる陳述行為を行う」という一種

の「仮人称発話」としてアイロニーを捉える仮人称発話説を提示した。後に、橋元氏は、言語行為の基底構造を「*TELL you that p*」として捉え、「発話主体として、もう一つ別の一般人称 *X*、つまり既に流通している言説の発話主体を挿入」し、「*TELL you X TELL that p*」という構造をとる発話を「汎人称発話」と呼んだ。そして、アイロニーのような「汎人称発話においては、基本的に既存の言説世界を再言語化しているに過ぎず、原則的に命題の真実性は直接話し手とは関わりをもたないから、通常の陳述の誠実性条件は妥当しない」と説く。

この立場では、(1)は、送り手が既存の官民調和論者の言説を再現語化していることになる。特に仮人称発話説の場合、虚無党を批判する調和論者の視点に送り手が移動することで、調和論者を皮肉っていると説明される。

だが、仮人称発話説・汎人称発話説には欠陥がある。第一、両説の依拠する遂行仮説は、すべての言語行為の基底に唯一の遂行動詞、潜在的主語である話し手、間接目的語である聞き手が指定され、通例の文はその遂行節が削除変形を受けたものだとする説だが、理論としては既に瓦解している。

(㉔) 地球は平だと私は君に言明する

(㉕) 地球は平である

まず、遂行仮説は、遂行節を持つ(㉔)と補文(㉕)が同じ真理値を持つことを前提とする。だが、(㉔)が真でも(㉕)

は偽である。この故に、遂行仮説は成立しない。汎人様発話語は、平叙文以外に遂行仮説を認めるという例外を主張するかもしれない。だが、遂行仮説が、語用論を通常の意味論に還元する試みならば、(き) (ぎ) の用法の差を説明するのに語用論／意味論という区別を用いることはできない。

また、間接発話行為でも、一方で多くの文が複数の発語内の力を持つように見え、地方で一つの行為に数多くの文が対応する以上、潜在的遂行節の仮説は文に間違つた発語内効力を付与しかねない。一つには、(き) の場合、字義的にもイデオムとしても両方の読みが可能である。(ぎ) が能力の質問と解釈した場合は(き) が、実際の依頼と解釈した場合は(き) が妥当な答えとなる。

(き) そのスーツケースを私のためにおろしてくれることができますか

(き) もちろんできますとも

(き) ほら

二つには間接的な力が働くときにはそれは常にイデオムだと主張しなければならない。三つには、イデオム説は、どの文脈で解釈が得られるかということを説明できない。それを可能にするのは関連性理論を初めとする推論説である。

第一、仮人称発話説の依拠する視点移動には疑念がある。⁽²⁰⁾ 視点移動の距離が大きければ大きいほどアイロニーの効果は強ま

るはずだが、直接の発言の方が効果はある。

以上の理由により、仮人称発話説・汎人称発話説には理論的に破綻する。もちろん、アイロニーの成立は、橋元氏が指摘する如く、言及やほめかしにあるのではない。それは、あくまで言語外的要因に依存し、自体と発話を媒介する語り手の発話態度等を視野に入れなければならない。そこで要請されるのが、送り手の発話態度と話法の観点からアイロニーを捉える認知的なアプローチである。

三、『雪中梅』における発話態度と話法

関連性理論では、アイロニーを社会的期待や通念等の他者の言葉のエコー発話、即ち言及として考える。だが、それは、ポスト構造主義が言う引用と同じではない。関連性理論は、言語行為論を理論的原点におかず、結果的にその知見を生かした理論構築をめざす。表出命題に対する話し手の態度を含めた表意である高次表意も、言語行為論の知見を取り込んだ概念である。ある想定の下に別の想定を用い、誰かが考えそうな情報を発話する解釈的使用は、発話の表意に対する話し手の態度を示して意味を作り出す高次表意を組み込んだ言語運用である。エコー発話としてのアイロニーも、解釈的用法となる。なぜなら、アイロニーとしての解釈は、他の人が述べたであろう発話を発しながら、話し手自身はその発話が表す意見から自身を

切り離していると解釈される場合に生じるからである。

(㉔) 今日はいいい天気だね

(㉕) 本当にいい天気だね

Bと遠足に行く前に、それを楽しみにしていたAが(㉔)と発話したが、途中で雨が降ってきてBがAに(㉕)と言ったとする。(㉔)は、(㉕)をこだまのように引用しつつ、その発話の立場からB自身を切り離すことで、Aに対するアイロニーを述べている。(㉕)のように、誰かが言った発話をエコーのように繰り返して、その発話の内容や示唆を否定する場合がアイロニーだとするのがエコー発話説である。

エコー発話説で(二)をアイロニーとして説明する場合、次のようになる。(一)は、皇帝暗殺を大逆とし虚無党を否定する官民調和論者の一般的見解・通念に言及し、そこから語り手の身を引き離すことで皇帝暗殺を妥当な行為とし虚無党を肯定的に捉え、官民調和論を皮肉っている。

繰り返しれば、認知的な言語運用としてアイロニーを捉えるなら、解釈的用法の、発話の表意に対する話し手の態度を示すことで意味を作り出すという側面をより全面に出す必要がある。アイロニーは、事象と出来事に対する発話者の主体的な心的態度と、解釈者の意味づけの關係によって発生すると考えられる。

末広鉄腸『政治小説雪中梅』(博文堂一八八六・八)には、富永春に横赤慕する川岸萍水が、春の父の遺産を横取りした叔

父と結託して父の遺言状を作らせ、春と結婚しようとする目論むエピソードがある。その時の春の解釈で例示しよう。

(㉔) 御勘弁を下さいませ。此の通り御父さんの御遺言も御座いますれば、お思召に従ひまして早く身を極めるように致しませう(『雪』下4)

(㉕) ナンボ発明でも謀書に気が付かぬのはサスが女で可愛さうなものぢや(『雪』下5)

(㉔) 遺言状は墨色と云ひ書風と云ひ亡父の書いたものでないことは一寸と見て分かります(『雪』下6)

(㉔)は、記名部分の墨の古さや字体と本文部分のそれとの違いから遺言状が偽物だと指摘すると、叔父が激怒したので、その場を収めるために春が発した言葉である。(㉕)は、叔父からその時の状況を聞いた川岸の配下の松田の言葉であり、この立場では(㉔)は叔父への素直な詫びとなる。一方、国野に相談したときに春が言った(㉔)からは、遺言状が正当であるならば従うが、偽造されているのだから従うつもりはないという皮肉として(㉔)が発話されていたことが明らかとなる。受け手が送り手のアイロニーをそれとして解釈しない事例として(㉔)はある。同様に送り手に意図がなくとも受け手がアイロニーとして解釈する場合もある。送受信者双方がアイロニーと認識する言説が狭義のアイロニーならば、一方のみがアイロニーと意図・認識するような言説は広義のアイロニーと呼べよ

う。

また、アイロニーと話法との関係は次のように説明される。既に今井邦彦氏は、「アイロニーとは自由間接話法⁽³⁾の一種」だと指摘している。自由間接話法は、語り手と作中人物の「二つの声、二つの意味論的・価値論的体系の標識を混淆的に持つ」とされる。言葉の相違はあるものの、間接話法の伝達部を示さない等の統語的特徴も、語り手が作中人物の思考・発話に言及していることを示す点で、エコー発話説に対応する。山口治彦氏も、自由間接話法・「描出話法は語りにおけるエコーの一形態」だとする。アイロニーが解釈的用法である以上、自分の言説の中に他者の言葉⁽³⁾を能動的に取り込み、話し手が聞き手にそれらを何らかの方法で区別して提示するという話法概念は不可欠なのである。

再度、本稿の立場から(1)のアイロニーを生成する語りの機構を説明しよう。(1)のアイロニーは、『鬼啾啾』が種々の先行テクストに言及してテクストを織りあげているからではなく、夢柳が語り手や作中人物に視点移動しているからでもない。そのような言説戦略を提示する発話態度と話法を送り手が主体的に言語運用しているからである。アイロニーは送り手のある特定の心的態度の現れであり、アイロニーの成立は送り手の態度と受け手の解釈の関係に起因する。政治小説は、そのような物語コミュニケーションの動態を顕示化させたジャンルに他なら

ず、物語構造の解明が急がれるのである。

- (1) 『日本近代文学大系』(角川書店一九七四・三) 一三八頁

- (2) スペルベル&ウィルソン『関連性理論』(研究社一九九三・一〇)参照。関連性理論の応用は、拙稿「言説はいかに理解されるか」(『漱石研究』一九九七・五)。難波博孝「自動化された物語から逃れるために」(『日本文学』一九九六・八)は、物語解釈を規制する枠組から逃れるために関連性理論の推論モデルに着目する。難波氏は、「二つの文または表意に推意は一つではない」(四〇頁)としながら、「文章だけから書き手の意図をひとつに絞り込むことは無理」(四一頁)だと、書き手の不在によるエクリチュールの了解不可能性を説く。だが、関連性理論は、話し言葉における送り手の意図が予め一つに確定されていず、推意解釈されると説いていた。推意解釈における労力が初期言語と音声言語との間で差があるにしても、それは決定的な差異ではなく、程度の相違なのである。結局、氏は、書記言語Ⅱ多義的／音声言語Ⅱ一義的という自動化された図式に自らの分析を回収させている。

- (3) 拙稿「宮崎夢柳『自由の凱歌』の言説戦略」(『文

学研究論集』一九九七・三 参照。

- (4) 尾崎行雄『続公会演説法』(一八七九・九)の術語で、前者は、「外貌は疑問なれども其精神は尋常決断言語を下すより却て確然」たる反語であり、後者は「陽に之を議らずして暗に之を議る」諷刺・アイロニーである。

- (5) 黒石大『雄弁美辞法』(一八八二・三)の術語で、「人ニ知ラシメント欲スルノ意ヲ反对ニ言明スル」アイロニーである。

- (6) 『意味と他者性』(勁章書房一九九四・一一)二三八頁。

- (7) 『意味と他者性』一三八―九頁。

- (8) 『始源の反語』一二六頁。

- (10) 深谷昌弘・田中茂範『コトバのへ意味づけ論』(紀伊国屋書店一九九六・六)二五四頁。

- (11) 『うその言語学』(大修館書店一九七三・一〇)一〇五頁。

- (12) 『うその言語学』一〇六頁。

- (13) 『背理のコミュニケーション』(勁章書房一九八九・一)七八―九頁。

- (14) 加藤周一「逍遙訳『ジュリアス・シーザー』について」(『加藤周一著作集17』平凡社一九九六・一〇)

三七〇頁。

- (15) 『背理のコミュニケーション』七八頁。

- (16) ジュリア・クリステヴァ『記号の解体学1』(せりか書房一九八三・一〇)六一頁。

- (17) 『パランプセスト』(水声社一九九五・八)一五六頁。

- (18) 土田知則「間テクスト性の詩学」(『現代文学理論』新曜社一九九六・一二)一六九頁参照。

- (19) 「署名 出来事 コンテクスト」(『現代思想』一九八八・五増刊)二七頁。

- (20) 村山淳彦「ふまじめをまじめに考えたら」(『批評理論とアメリカ文学』中央大学出版部一九九五・三)は、「反復可能な言葉が無限のコンテクストで使われるということと、特定の発話を取りまくコンテクストが無限であるということは別の事柄」(一九六頁)だと指摘している。

- (21) 『背理のコミュニケーション』八七頁。

- (22) 「言語行為の構造」(『岩波講座現代社会学3』岩波書店一九九五・一二)一二二頁。

- (23) 注22に同じ。

- (24) ジェラルド・セイダック『発話行為の言語理論へ向けて』(文化書房博文社一九九五・一二)二二六頁参照。

照。

- (25) スティーヴン・レヴィンソン『英語語用論』(研
究社一九九〇・六 三二四、四八頁参照。
- (26) 拙稿「明治初期政治小説の時制をめぐって」(『日
本文学』一九九七・五) 参照。
- (27) 河上誓作「OverstatementとUnderstatement」(『言語学
からの眺望』九州大学出版会一九九三・八) は、偽悪
型(悪言)と偽善型(皮肉)とにアイロニーの種類を
二分し、送受信者のアイロニー認識の組合せから四類
型を提示した。
- (28) 「関連性理論から見たウソとマコト」(『言語』一
九九六・三) 二六頁。
- (29) ジェラルド・プリンス『物語論辞典』(松柏社一
九九一・五) 七一頁。
- (30) 寺島弘子「描出話法」とは何か」(『日本語学』
一九九五・一一) 八一頁参照。
- (31) 「繰り返せない言葉」(『グラマー・テキスト・レ
トリック』くろしお出版一九九二・七) 三〇二頁。

(石川県立松任農業高校教諭)